3つの「きょう育」（教育・郷育・共育）で子どもたちに学びと育ちを

学校	学校運営協議会	地域学校協働活動推進員等数（赤字は内学校運営協議会委員数）			地域学校協働本部
名張市立	箕曲小学校学校運営協議会	地域学校協働活動推進員	0 名	0 名	箕曲小学校 地域学校協働本部
箕曲小学校	平成30年4月1日 設置	地域コーディネーター	1 名	1 名	

取組の背景及び目標や目指す姿

背景

本校は、小規模校であるがため、小学校6年間の人間関係に大きな変化はなく、広がりも見込めない。
中学校入学後、不登校になってしまう傾向の児童もおり、その問題解決のため、小学校段階から、学校外の人との出会いを通して学習や体験を行い、それらの経験から自信を積み重ね、自己肯定感・有用感を高めようと考えた。

目標や目指す姿（学校）

友だち、先生、地域の方とつながり、自信をもって、あきらめずに取り組む児童の育成

目標や目指す姿（地域）

人とのつながりの中で安心して暮らし、子育てできるまち

箕曲小学校学校運営協議会　の特徴

委員の立場や属性等

- □ 校長
- □ 地域づくり委員会　代表
- □ 市民センター　代表
- □ PTA　代表
- □ 地域住民
  民生児童委員

など、計 **10** 名で構成

年間平均 **3** 回程度開催

効果的な運営の工夫

会議を円滑に行い、子ども像の姿から課題解決に向けた「熟議」ができるように、事前に学校と会長、担当等で、議題の選定と協議の柱を決める打合せを行っている。
運営協議会発足当時は、学校からの報告事項や提案が多く「熟議」に至らないこともあったが、現在では、各委員が当事者意識をもち、課題解決に向けた前向きな提案がされ、実践することができている。また、運営協議会の場では、地域での子どもの姿を共有することができ、多面的に子どもの様子を知ることができるようになってきた。

特徴的な取組と成果・効果

取組

学校運営協議会

自己肯定感・有用感を向上させていくためには、コミュニケーション力を高め、他者と関わる機会の確保が必要と考え、異学年での活動や地域の大人と関わる機会を持つこと、体験を通じて自己肯定感・有用感を、児童だけでなく支援いただく方々にも感じとることができる「みのわ冒険の旅」を企画した。

「熟議」の様子

地域学校協働活動

総合的な学習の時間に行った「みのわ冒険の旅」では、ウォークラリーに見守りボランティアを配置し、子どもたちの安全確保に努めた。各チェックポイントでは地域コーディネーターが選定した地域ボランティアが歴史や地域の想いを伝えることで、郷土愛の醸成にもつなげた。

「みのわ冒険の旅」

「コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的実施」のための工夫等

「みのわ冒険の旅」では、学校は、異年齢でグループを編成し地域巡りをすることで、高学年がリーダーシップを高めるとともに、低学年に「こんな高学年になりたい」と憧れを持たせ、次の世代への引き継ぎをねらっている。また、地域コーディネーターが中心となって、歴史や地域の良さを後世に伝えるために、適切な人員配置をするとともに、グループごとに見守りボランティアを同行させ、児童の安全確保に努めた。後日、児童は学んだことを一人一台端末でまとめ、保護者に対しても地域の良さを知ってもらう発表会を実施した。これは、学校運営協議会での議論や企画に基づき、学校・地域が互いの課題を確認し共通理解を図る中で、地域学校協働活動として、互いが当事者意識を持って実践した好事例である。

成果・効果

古くからある地域にもかかわらず、本校在籍児童は、他地域から転入してきた児童が多く、地域と学校のつながりが弱くなってきつつあった。そこで、学校行事や授業において、地域ボランティアの協力を得ることで学校と地域のつながりを増やし、同時に児童理解を図ってきた。「みのわ冒険の旅」は、学校と地域の課題解決に向けた一つの切り口となった。実施にあたり、地域コーディネーターの果たした役割は非常に大きい。地域コーディネーターは学校の要望を聞き取り、最適なボランティアを配置することができたため、学校・地域ともに大きな成果を感じることができた。これは地域コーディネーターが、日頃から学校と良好な関係を持ち、地域住民とコミュニケーションをとり情報収集していたことで人材を選ぶことができ、学校の意図やねらいに沿った学習をすることができたからである。さらに、この取組がきっかけとなって、地域行事である「はなももクラブ」において、学校図書館を開放し、読み聞かせや書道、プログラミング学習等を行い、地域の方と児童の関係ができ、地域との交流も深まってきた。参加した児童が全校にこの行事を知ってもらいたいと、児童会がPR動画を作成し周知を図った。今後の取組にもチラシを作製し、広報活動につなげようとする動きがでてきている。これらの取組によって、様々な場面で地域の方から児童への言葉がけがあり、児童からも地域の方とコミュニケーションを取ることができるようになるとともに、自己肯定感の向上につながった。
当初の課題である、児童の自信のなさ自己肯定感・有用感の低さは、様々な活動の中で少しずつ解消されてきた。行事等で発表する児童の声が大きくなり、地域の中で進んで挨拶する姿が見られるようになった。また、児童だけでなく保護者も含めて地域行事への参加者が増加し、地域コミュニティの広がりがでてきた。